

18世紀後半のフランス絵画における「屋外での娯楽」

吉田朋子（京都ノートルダム女子大学）

18世紀後半のフランス絵画に頻出する主題のひとつに、庭園や街角でダンスや大道芸の見物などに興じている人々がある。フラゴナール《サン・クルーの祭》（フランス銀行所蔵）を一つの頂点として、多くの作例が残されている。本発表は、この「屋外での娯楽」ともいうべき主題について考察するものである。

いうまでもなく、これはブーシェのパストラルやヴァトーの雅宴画、さかのぼれば、「愛の園」の図像伝統を受け継ぐものである。ジャンルという視点から見れば、風景画と風俗画の融合でもある。さらにイタリアとオランダからの影響が加わることによって、表現は多様化している。画家たちは、修業のための滞在やパトロンのグランド・ツアーへの随行などを通して、廃墟と自然が共存するイタリア風景の魅力を発見した。また、収集家に絶大な人気を博した17世紀オランダ絵画の中でも、屋外で踊る民衆を描いた作品などが、重要な参照点となっていた。

以上のような複雑な状況を踏まえつつ、改めて注目したいのは、当時の鑑賞者にとって身近かつ具体的な行事を示唆する作品が出現することである。ヴェドゥータのような地誌的な正確さは欠くものの、特徴的な建造物の挿入、版画の場合は文字による説明の添付などによって、実在の場所であることが示される。

王室の祝賀行事・宗教行事での花火や行列などに加えて、当時、パリ近郊の庭園で行われる祭や市内で開催される市は、多くの人々が着飾って屋外に集う格好の場となっていた。サン・クルー宮殿の庭園で毎年9月に開催される祭、サン・ジェルマン・デ・プレの市場、さらにパレ・ロワイヤルの中庭などが挙げられる。これらの場所で画家たちは、人形芝居や大道芸、さらには噴水や舟遊びなど、豊かなモチーフを得ることができた。ヴァトーの雅宴画に見られるような想像上の世界ではなく、現実の庭園や街路とそこに集う人々が描かれるようになる。しかし、この興味深い変化について、個別の作品研究を超えた検討はなされていないようである。

ここでは、同時代の祝祭行事に関する一次資料と、絵画・版画・素描の作例との比較検討を通じて、「屋外での娯楽」という主題が当時の鑑賞者にとっていかなる意味を持っていたのかを明らかにしたい。彼らの多くがパリを中心とする都市生活者であった。人口過密状態に置かれた人々にとって、屋外での娯楽は、新鮮な空気を享受する待望の機会であるとともに、お互いに知らない人々が集う場でもあった。娯楽の描写は、虚構の憧れの世界から、実感を持って受け止めることのできるものへと変化していったと考えられる。庭園に集まる人々の姿は、「楽園」への根源的な憧憬を根底に秘めつつも、自然に対する感性の変化、社交の場の変容を反映しているのである。